
ヘンゼルと迷いみこ

絢無晴蘿

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヘンゼルと迷いみこ

【Nコード】

N4015BA

【作者名】

絢無晴蘿

【あらすじ】

みなさん、世の中って不思議なことが沢山ありますよね？
そうなんです。

わたし、いま取っても不思議なんです。
え？

話がよくわからない？
私もわからないんです。
なぜか私、記憶喪失で生き霊になっていました。

「ようこそ、ジャック・オ・ランタンに」

ジャックとキャンディー

第一話

ジャックとキャンディー

みなさん、世の中って不思議なことが沢山ありますよね？
そうなんです。

わたし、いまとっても不思議なんです。
え？

話がよくわからない？

私もわからないんです。

なぜか私、男の子の前に立っていました。

「ようこそ、ジャック・オ・ランタンに」

本や小物、筆記具や紙、そのほか様々な物が置かれて雑多な机に肘を置いて、少年は私の方を見て言いました。

綺麗なオレンジ色の髪には、なぜか女の子がつけるようなピンがつけられています。

そして、真っ黒なコートを着ていました。

まあ、家の中でコートなんて、暑くないのかしら？

「あら、ここはどこなんでしょう」

どこかの部屋のようです。

少年の座った後ろの壁には、古びた本がほこりをかぶって積み上げられていました。

まあ、ずいぶん汚い事っ！

掃除していいのでしょうか？

「随分戸惑っているようですね。しかし、大丈夫ですよ。みなさん、最初は戸惑うものですから」

「そうですか？私としては、この部屋の汚さが気になって気になって……あぁっ、水で流してしまいたいっ!!」

するととつぜん、少年は不機嫌そうな顔をしました。

「あんた、だれ？てかオレ、お前に話してないから。ほら、そこじやま」

「あら？」

後ろを向くと、私の姿に気づいていないのか、やつれたお父さんのような男の人が、少年の前に歩いて来るところでした。

思わず、少年の前をその人に譲って上げます。

まあ、私って優しい人。

「もうしわけない。私はどうしてここにいるのだろうか」

おやまあ、この人もどうしてここにいるのか分からないようです。

「大丈夫ですよ。では、最初の違和感を話してもらいましょうか？」

男の人は、驚いたようです。

「なぜそれをつ」

「ここに来る人は、大抵そうですから」

「……」

どういう事なのでしょう？

男の人は、つらそうに言いました。

「おかしいんです。妻も、娘を、私の事を無視するんです。突然」

「そうでしょうね。それで？」

「なぜか、私の前で泣くんです。みんな、私を見て泣くのです」

「……」

「わからないんです。どうしてっ、どうしてっ……どうして、私はここにいますか？」

「それは、あなたの魂が道に迷ってしまったからです。あなたの目の前にある、黄泉路に至る道に気づいていないからです」

そういつて、男の子は立ちあがりました。

「あなたは、もう死んでいるのです」

そう言うと、男の人は、ぼうぜん顔を上げました。

「なにを言っているんですか？」

「あなたは、もう生きている唯人には視えない存在なのです。魂だけで、彷徨っているのです。自分が死んだことに気づかず。自分が逝くべき道も知らず」

「……」

「でも、もう見えるでしょう？ あなたの前に広がる道が」

「……そう、ですね。嗚呼、私は……そうか、そうだったのか。すまない。お前たちだけを残して……」

そう言うと、男の人は消えてしまいました。

呆気なく、消えてしまいました。

本当に、呆気なく。

「あら……」

あの方は、死者？

「さてと。で、あんた誰？」

「あらあら。私は……さあ、誰でしょう？」

「ふざけてんのか？」

「いや、ふざけてないわ。あら、でも、あなたは誰ですか？」

男の子は、思いつきり嫌そうに顔を見ました。

「オレの名前は、ジャックだ」

ジャック君、ジャック君。

よし、覚えたわ！

「なるほど。ところで、スパロウ君。ここはどこなのかしら？」

「オレの問いに答える気あるのか。あと、オレの名前はジャックだ」

「そんなに眉間にしわを寄せていると、ザビエル禿げになってしまいますよ？」

あら大変。

ザビエル禿げは、一部の人に人気はあるけど、一部の人にはうざがれてしまうわ！

若いのに、なんて大変なことなんでしょう。
苦勞しているのね。

「な、なんでそんな事になる!!」

「おかしいかしら?」

「おかしい!!」

この人はきつと、ザビエル禿げが嫌いな人なのね。

「ところで、先ほどの男の人は、どうして消えたのかしら?」

「……死んだことを自覚したから、行くべき所に逝ったんだよ」
「まあ」

あの人は、やっぱり死んだ人だったの。

「で、お前、名前と、なんでここにいいのか答えろ」

「名前……じゃあ、私の名前はキャンディーよ」

「じゃあ?」

「そう。あとね、間違ってもキャラットって言わないでね。私、ニンジン嫌いなよ。あ、でも飴も嫌いだわ。どうしましょう」

「つつこみどころがありすぎて、どこに突っ込んだらいいのか分からない」

「それは、大変ね」

「……」

あら、なんで黙ってしまったのかしら。

「お前、霊だって自覚ある?」

「あら?」

何を言い出すのかしら。

「生き霊だって、自覚あるのか?」

「いき、りょう?」
なるほど。

「だから通り抜けができるのね! すごい、すごいわ、私!!」
「……えつと、あつと……なんだって言うんだ、この人??」

こうして私、キャンディーと、ジャックは出逢ったのです。

登場人物

ジャック・オ・ランタン
主人公

キャンディー

語り手

ジャックとキャンディー（後書き）

ジャックとキャンディーの物語。

ちよっとした長編になりますが、よければお付き合いください。

裏一話 ジャックとシンデレラ

裏一話

ジャックとシンデレラ

ここは、行くべき所に逝けない霊達が、最終的に辿り着く館、

ジャック・オ・ランタン

そこで、オレンジ色の髪で片目を隠した少年が、霊達を出迎える。

ジャックが目を開けると、そこには少年が立っていた。

「あれ？」

「ようこそ、ジャック・オ・ランタンへ」

「……」

緑色の髪に、灰色の瞳の少年。

彼はまじまじとジャックを見ると、笑いだす。

「うわっ、本当にジャック・オ・ランタン？ あ、ボク死んだの？」

「いやだなあ。ほんと、笑っちゃう！」

「は？」

なんだ、こいつ。

そう、ジャックが思ったのも、仕方ないことだった。

「ボク、アルトって言うんだ。君は？」

「……ジャック」

「へー。ジャック……ジャック・オ・ランタンのジャック？ そのまんま！」

「……意外だな。若いのに、オレ達の事知ってんのか？」

「うん。まさか、本当にいるとは思ってもいなかったけど。あつ、ムラサキに教えたら喜ぶかも！……あ……」

馬鹿騒ぎをしていたというのに、突然黙りこんでしまった。

「ボク、死んじゃったんだ……」

「……」

この館に来る者は、大抵は死者だ。

彼も、死者だ。

死者は生者と会う事は出来ない。

「死んだって事を自覚しているのなら、あなたの前に広がる道が見えますよね？」

「……そう、だね」

「……」

「……」

少年は、困ったように笑う。

「でも、まだ逝けないや」

微かな、哀しみを伴う笑顔だった。

「そうですか」

「止めないの？」

「あなたのような人は、ときどきいますから」

「そっか」

時々、迷ってこの館に辿り着き、死んだとわかっててもなお、逝かない人もいる。

「ボク、約束したんだ」

「？」

「死なないって」

しかし、彼は死んでしまった。

「約束破って、死んじゃった。……だから、せめて……まだ、逝きたくない」

そう、彼は笑うと、ジャックに背を向ける。

「なるほど……まあ、いいんじゃないのかな」

そう、彼の背中に言葉を贈った。

「ボク、あの子を残して逝けないから」

そう言って、彼は消えてしまった。

たぶん、その、『あの子』の元へ。

「ああいう奴らばかりだったら、良いんだけどな……」

こっちの説明も無く自分で死んだことに気づいたり、きちんと理解して死を受け入れたり。

説明の手間も、説得とかも、しなくていい。

それを、出来ない人もいる。

死んでいる事に気づかない、死を受け入れない、理解できない。

そんな人々は、どうなってしまうのか？

「憂鬱だ」

そんな彼等は、もはや死者ではない。

そして、それを狩るのが、ジャック・オ・ランタンの仕事……。

館の扉が叩かれた。

黒マントで姿を隠した男が館に入ってきた。

「……仕事だ」

それだけ言っと、また外へ行ってしまう。

「了解」

そう言っと、急いでその後を追った。

追加登場人物

アルト

人待ち

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4015ba/>

ヘンゼルと迷いみこ

2012年1月10日21時47分発行